

特42

837

赤穂義士銘傳全



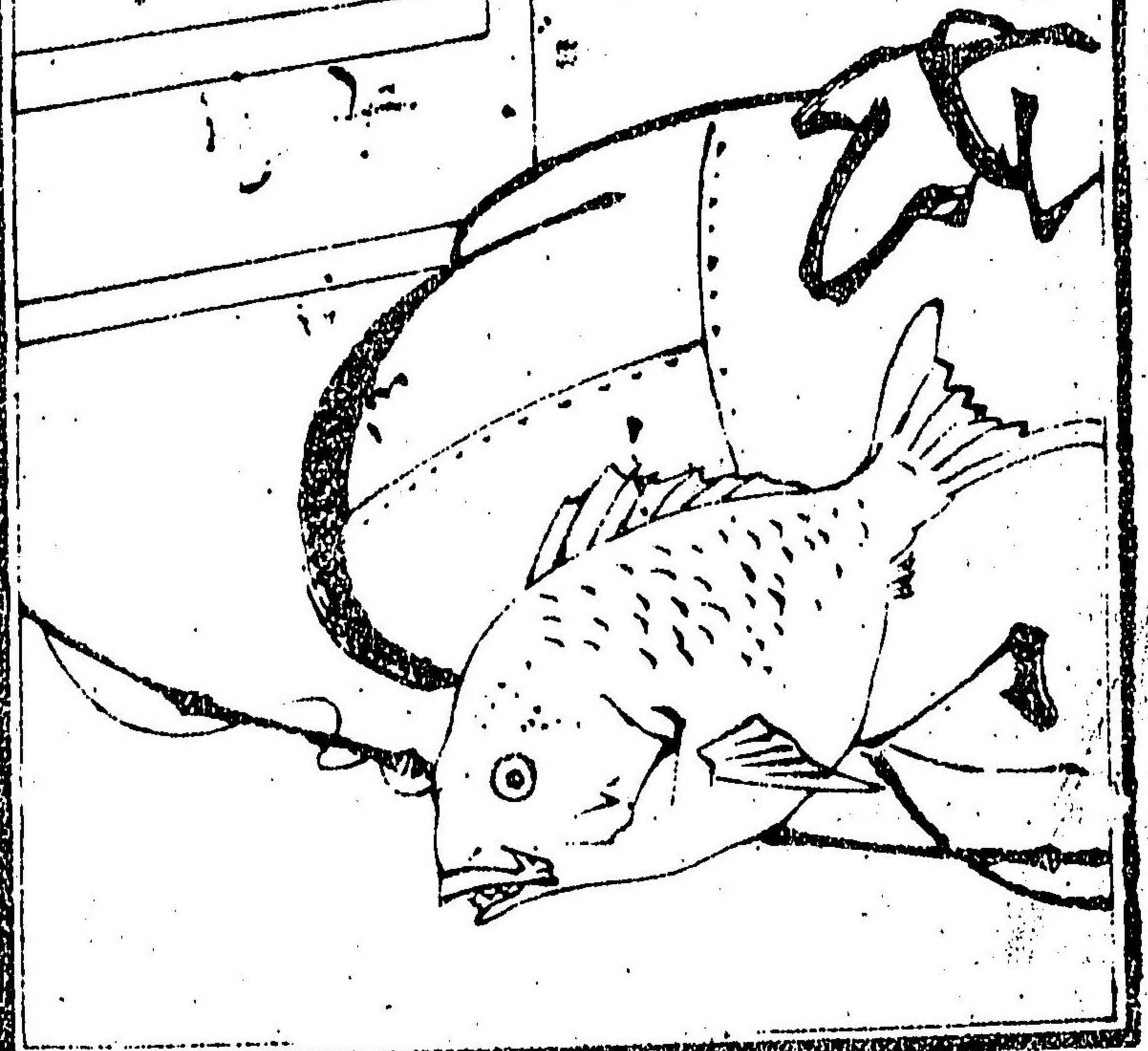
No 41867
23



忠臣藏大序

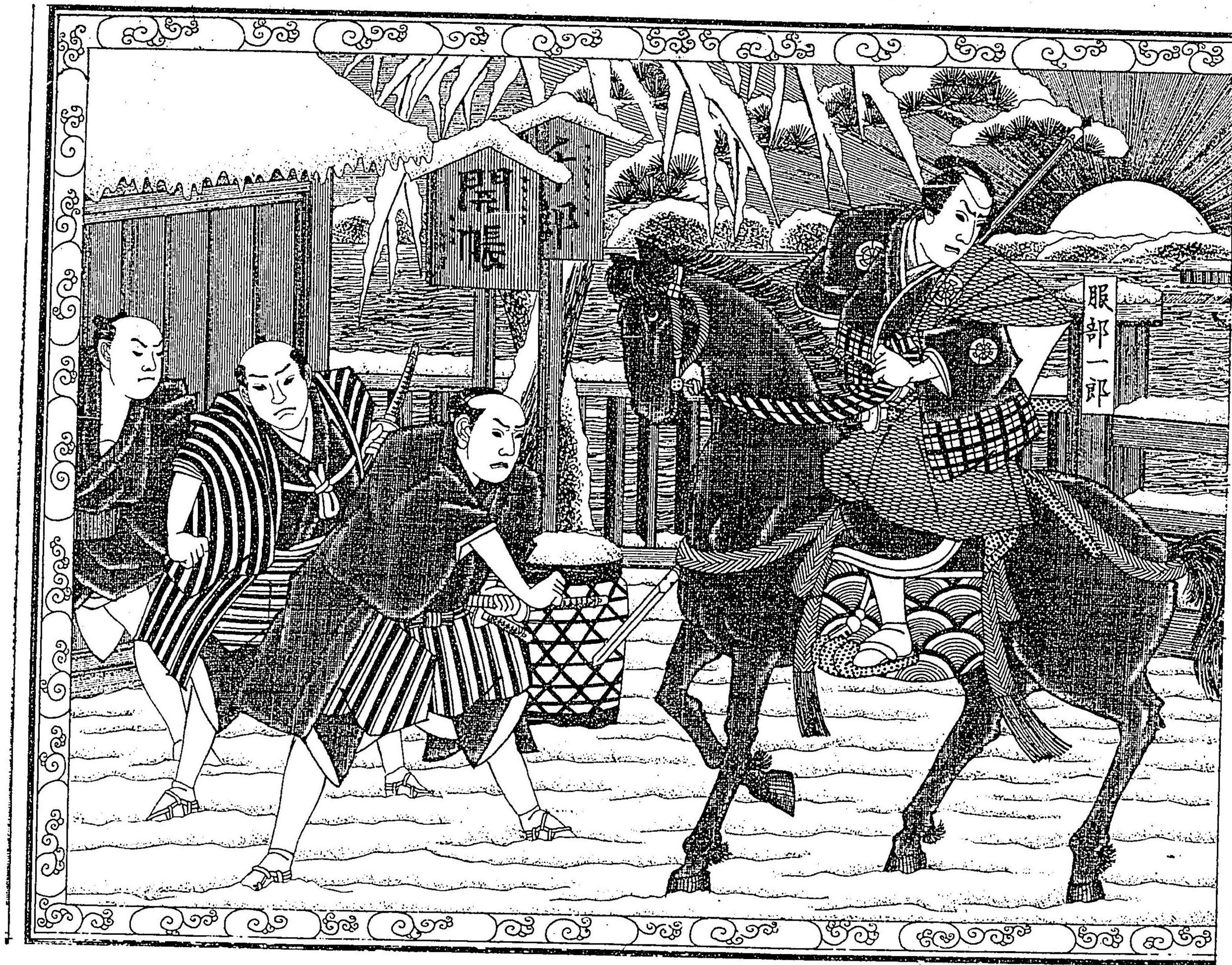


等親首級
大吉利布









二段目



千葉三郎兵衛

高百五右
行年三才

清水一覺

め込讀

國に志を盡し孝子出
家貧くして孝子出
るに互あかき赤穂
の義士大石内蔵介以
下四十七人其主君吉良氏
のたのめ
身た殺し家
亡なる
辛萬
木懐
以て天
然の

諸侯は争臣五人のれは無道と
いども其国を不失と其の金
言信ふるもか桃井若狭之助
安国、執権高の師直が鶴ヶ岡
での雑言をいよさへぬ明日ハ
出合次第は真ニツと此由家老
本藏(密)は談うて後々の支
共万事言聞するよ本藏主
人の止がべきを了りて即座
よ一刀借受まつとの通りよ
か(ぬ)と庭の松ヶ枝切捨
て主人の心晴しはき其夜
ひそりよ金銀を多くかくり
て師直(主人)の無事を頼
入ぬ天晴忠義の士と云ふべし



潮田又之丞

潮田又之丞
高二百石
行年三才

然まども此堆は過ハ
されバ萬年不朽の芳
名を輝かすを得んや
今よ到て見れば以人
不幸とせらる將之幸と
論者と雖ども慢

三段目



良雄ハ
播州赤穂の人
秀郷マシテ浅野内
匠頭長矩殿の執權大
石頼母が子あり母ハ長矩
殿の父長重殿の妹あり
主家大坂の後復讐の
決心色し出立りて
終ニ本懐を達ス

柔よく強を制するの信ふるるる
怨も眼も暗き夜みつろくや
黄金の賄賂心傾むき若然之
助は昨日の無礼の詫とせんもの
と出仕を松の長廊下一徹短慮
の桃井の今日を師直真ニツと
怒を合む長袴置さへりも荒々
しく来たるを夫と帯したる
刀投出し詫入は是非なく奥へ
入る跡へ相手替りて塩谷判官
運刻を詫て差出さ妻が拙ま
き歌の点削見るより師直我
が總の叶ぬ事と高貞を罵
しうなるをり又傷及び事
を是非あぐる



近松勘六
力量衆本勝マシ
聞東マシ共ニ

四段目

忠臣蔵



吉田忠左門
 浪人して
 吉良の家
 を伺ふこと
 尤も深
 計入の
 夜搦手の大将主
 税と捕佐一花々
 敷働きをさせハ
 づつたれの老人と
 云ふハ
 堀部安兵衛武常
 高三百石
 行年三十四才

国乱れて忠臣頭も家貧くして
 孝子出つと器量も時々大星が主
 家の喪入人心を種々計りて大望
 の勝を堅むる銭石の義士を見
 出も苦肉の智畧金配分と事決
 一昼夜詰たる坐敷さ一今日を暇
 りの見納と流石は猛き氣も折
 け暫時躊躇う其内は早々屋敷
 を明渡せと厳き詞は是非
 ふくも門を出入りかつかうく
 イむところへやうりの若侍
 とも大勢して離散を無念と
 立戻ると制し止めて連返
 絶念の短刀取出し血を舐り
 て御主君の心をつぐぞ憐れふる

五段目



堀部弥兵衛金丸
 隠居
 行年
 七十七才
 金丸は
 山本流
 岡崎金右衛門包秀
 高百五十石
 行年二十五才

五段目



條突く如き夕立よ子故の闇
 与一兵五郎勘平よ忠義をい立
 させん娘が身を祇園ふる
 カ(責と約も五十金懐かいて
 となくと戻る跡より追天て
 無慈悲に殺せ定九郎黄金う
 むて悦ふところ(狂ひ走來る
 手負猪是れいと驚ろく胸元
 筒音高く飛び來る鉄丸惡の
 報ひ(束)血を吐たふる其
 處(火繩吹消)勘平の仕済
 たりと索りより猪まはあふ
 旅人の(葉)あるとふところ
 へ差入る手先(五十兩天の與)
 と悦びくる



六段目

忠臣蔵



間新六郎 光風 行年 高五十五
 間喜兵衛 充延 行年 高百石
 行年 高六十

間新六郎

道を急ぐ早野勘平とつうへ戻る
 我家の門駕籠に乗たる女房
 の様子不審と尋ねれば箇様く
 と我が身の上思ふて身賣の
 顛末を聞て驚く財布の縞から
 若しや夫れまのゆらぬと思案
 の胸もどつちいつ涙ふくれる女
 房かゝる別れ苦しう立出る跡
 一仲間の獵人がこやく昇来る
 与一兵正の死がいと見るより老母
 の歎側に見兼て勘平が立節落す
 財布を見何故舅を殺せと責
 問表(原千崎)来りつ甚平が
 非義を責るよ腹切て言訊する
 ぞ哀ふる

忠臣蔵



間重次郎 光興 行年 高百石

忠臣蔵

七段目



浮川竹の苦界をい出で夫や両親
 は相違ふ支の嬉しさをせめて
 一筆知らせんと硯引寄せ書け
 る後寺岡平右エ門妹が勤の
 様子も尋ねんものと顔見合
 せ互は夫と驚きつゝなかるは我
 が家の大喪を知らで種々尋ね
 寺岡包ももへなけれは父と夫
 が横死より母が病死の事迄と語
 るもたつら打歎き絶え入りり
 有りたるを寺岡諭て言ひる
 御臺の密書を見上り命我
 身よと兄弟覚悟の折ら大星止
 てちるの手も持し白刃其床下
 突各九太赤は深死たは是天罰から

岡島 八十五
 二門
 高世五
 元來猛
 烈の士
 主家亡ぶるの恨
 家の中間
 邸中の探偵
 ふ一太石
 一助と
 村松三太夫
 高五十五
 行年共
 高直八
 野家の
 留守居殺
 の後賤しき業
 入て吉良の邸
 入こ敵を討ち

村松三太夫

竹林唯七
 高虎の内
 匠殿の近
 侍役より
 短髪
 本懐を

八段目



高房 主君の腹の期及の遺言奉て本國に馳せ

大石 傳へて 菅城 殉死を 次
下男 元助 誠忠の もの
て 討入 夜は かり
ざる 大功を 成
たり

飛鳥川 昨日の 湖へ 瀬と 替り 浅
きも 深き 加古川の 娘小浪の 父よ
りの 免るゝと 受けて 母と 共幼年
よりの 言号 思ひつゝ 山科の 力
弥方 (嫁入り) も まゝ へ 何と けり
か不こ 氣に 我家を 跡は 突く
杖も 双六の 外踏も 見ぬ 五十
三次の 駅路を 日毎に 替る 仮
枕 蔭の 細道も や 越へて ころ
人よ 大井川 の おて 近江の 八景
とに 夫走ま くれども 女の 途の せ
ら びいつ 三井寺と 白雪の 比良の 山邊
を 打かめ くれ 辛崎の 旅籠の せ
重荷の 石山の 堅い 契の 有るもの 安
房津 片田を 氣に かけ 山科 (と) 宿する



正 國ハ 本懐を 達して 後
細川家へ 御預けと かり
よ 下は 白き 女の 服を 着
居たり 其故を 問へ 母の
賜もの ありと 至孝の 士を 助

大石 傳へて 菅城 殉死を 次
下男 元助 誠忠の もの
て 討入 夜は かり
ざる 大功を 成
たり

忠 義 成

九段目



前原伊助宗房 高十郎左衛門尉
 宗房、江州前原
 産かり曾て鎌倉
 は遊び一時
 浅野家の臣
 十右衛門不慮に敵討に
 此由内匠殿
 遂に明約の別
 のこりたり

大石瀨左衛門
 信清 高百石
 信清 旧本
 家の主

政行、他家へ
 行きて在り
 大塚のとき
 主家の恩
 を思ひ
 金子
 千兩を
 持て
 加盟
 せ

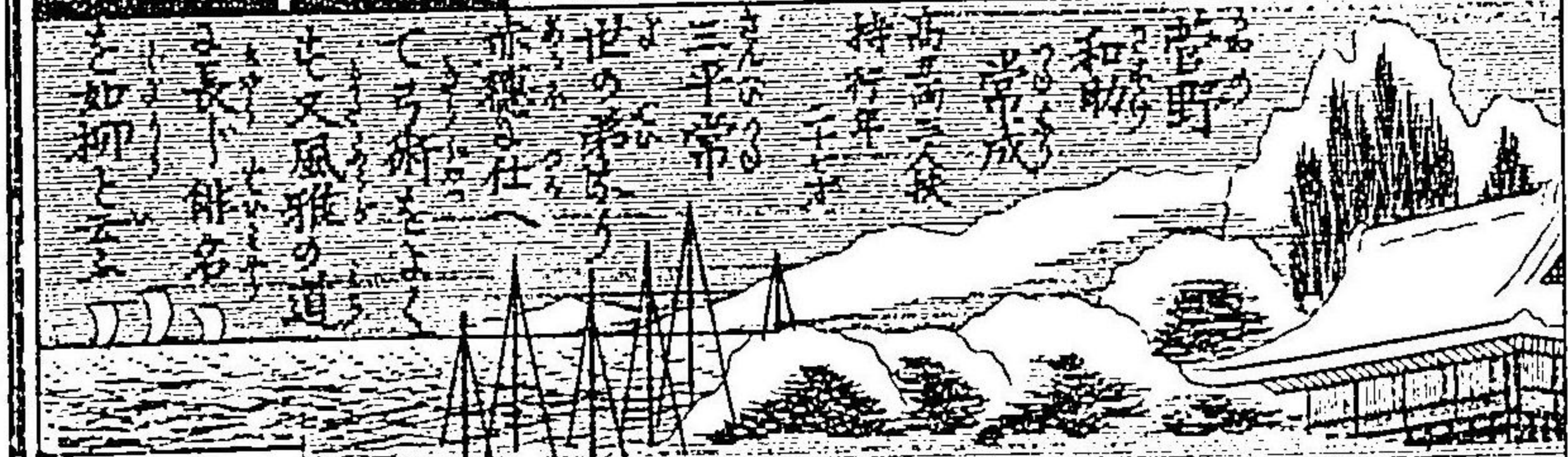
菅谷半之丞
 政行 高百石
 行年 五十五
 三十七

風雅でもなく洒落でもなく浮世の
 かれて詫住居身と持前大星が留
 守もあつたら妻ち石送々来る嫁小
 浪が母の戸なせは接對も昔と捨ね
 折目高姑女去の一言は取付沙もく
 小浪母の白みせし夫より預る引手
 腰かつと娘覚悟と立上る表は吹
 出は尺八の曲さへ鶴の巢籠焼野
 の雉子夜の鶴子思ふ身の恩愛
 は白刃もよめる親心奥より石
 の御無用と言つ出て祝言を免
 るは悦ふ加古川の母と娘一本
 藏の白髪首を引引手は申受
 んと難題は其首上んと笠脱捨内
 這入加古川本藏遂は力弥の手



十段目

忠臣蔵



三村治郎左五門 高五兩三入扶持 包常八少身かれ
 志ハ鉄石のこころ 常八大石に随従して事を
 はかり 遂ニ本意を達ス たり 大丈夫の士と
 寺坂吉右五門
 高五兩二入扶持
 行年四十三才
 信行ハ浅野家の
 足がるふれども
 忠勇無双の傑士
 大石其の
 志一を感ずて盟
 約の列に加
 たり



版權所有

明治廿三年
 六月五日印刷
 明治廿三年
 六月十日 出版

東京市虎ノ門区南元町十五番地
 編輯印刷 叢書 金之助

